報　告　書

令和元年度
広域連携サミット

各市の地域資源を生かした今後の広域連携のあり方
～魅力なくして連携なし～

日　時：令和元年 11 月 1 日（金）15:00～17:30
会　場：たましん RISURU ホール　小ホール

【 概 要 】

会 議 名	令和元年度広域連携サミット
日　　時	令和元年 11 月 1 日（金）15:00～17:30
会　　場	たましん RISURU ホール　小ホール
主　　催	立川市、昭島市、小平市、日野市、国分寺市、国立市、福生市、東大和市、武蔵村山市

出席者名	立川市長	清水　庄平
	昭島市長	臼井　伸介
	小平市長	小林　正則
	日野市長	大坪　冬彦
	国分寺市長	井澤　邦夫
	国立市長	永見　理夫
	福生市長	加藤　育男
	東大和市長	尾崎　保夫
	武蔵村山市長	藤野　　勝
	中央大学名誉教授	細野　助博

参加者状況	一般来場者	38 名
	各市議会議員・各市職員	76 名
	招待者・関係団体	11 名
	報道機関	６名

１　開　会

（司会）

大変お待たせいたしました。ただいまから「令和元年度広域連携サミット」を開会します。私、本日の司会を務めます鈴木と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開会の挨拶に先立ちまして、ご出席者の皆様をご紹介いたします。立川市の清水庄平市長、昭島市の臼井伸介市長、小平市の小林正則市長、日野市の大坪冬彦市長、国分寺市長の井澤邦夫市長、国立市の永見理夫市長、福生市の加藤育男市長、東大和市の尾崎保夫市長、武蔵村山市の藤野勝市長、ファシリテーターの中央大学名誉教授　細野助博様、以上、10 名の皆様です。

２　開会挨拶（立川市長　清水庄平）

（司会）

続きまして、開会に当たり、立川市の清水市長よりご挨拶申し上げます。

（立川市長）

立川市長の清水でございます。本日は大勢の皆さんにこのような形でお集まりをいただきまして、広域連携サミットが開かれますことをとても幸せに感じておるところでございます。

この広域連携サミットは、１市だけでは解決できない課題を連携することによって解決できないか、このような思いで、４年前に８市の市長の皆さん方にご相談を申し上げましたところ、快諾をいただきまして、本日、今回で４回目の開催ということになりました。

この９市を含む多摩地域全体の共通課題が存在する中、近隣自治体との連携を積極的に進めていくことは大変重要だという共通認識をサミットの場で再確認することができたと考えているところでございます。

今回の広域連携サミットは、実質的に第４回ということなりますが、「各市の地域資源を生かした今後の広域連携のあり方について～魅力なくして連携なし～」と題し、９市それぞれが持つ地域資源を生かし、この圏域の魅力をさらに向上させるためには、どのような連携が求められるのか、今後の広域連携のあり方について、首長が意見交換を行うサミットにしようということになりました。

本日は、お忙しい中、中央大学の名誉教授であります細野助博先生にファシリテーターをお願いしたところ、大変気持ちよくお引き受けをいただきました。誠にありがとうございます。

２時間超の会合ということになりますけれども、活発な意見交換が行われ、実りある会合となりますことをご祈念申し上げまして、開会のご挨拶とさせていただきます。どうぞ

よろしくお願いいたします。

（司会）

ありがとうございました。

３「平成 30 年度広域連携サミット」開催報告等

（司会）

続きまして、昨年度、「平成 30 年度広域連携サミット」の開催結果についてご報告いたします。

お手元のパンフレット見開き右ページに記載されておりますが、平成 30 年 11 月 1 日に、総務省自治大学校を会場としまして、9 市の主催により開催いたしました。ファシリテーターの総務省自治大学校長松﨑茂様の進行のもと、「人口減少社会における広域連携のあり方～住みたい、訪れたい、活力あるまちづくりを目指して～」をテーマに、今後訪れる人口減少社会にいかに対処していくか意見交換を行いました。

今回のサミットについては、9 市それぞれが持つさまざまな地域資源を生かして、この圏域全体の魅力をいかに向上させていくか、そのためには、今後どのような広域連携のあり方が考えられるかという切り口で意見交換を行うこととなりました。また、ファシリテーターの細野様からのアドバイスもありまして、「各市の地域資源を生かした今後の広域連携のあり方について～魅力なくして連携なし～」というテーマで今回のサミットを行うこととなりました。

さて、ここでいくつかのご連絡を申し上げます。

まず、本日の流れについてでございますが、この後、本日のファシリテーター中央大学名誉教授細野助博様より 20 分間の基調講演をいただきます。その後、各市長からご発言をいただきまして、16 時 15 分ごろから休憩時間とさせていただきます。その後、16 時半から意見交換のお時間、そして、まとめに入りまして、17 時 30 分閉会という予定としております。どうぞよろしくお願いいたします。

また、本日は 9 市の特産品などを展示するＰＲブースを設けております。このホールを出たところに市ごとに並べて設けてありますので、休憩時間中などにぜひご覧いただければと思います。

ご来場の皆様からのご質問につきましては、受付でお渡しした「質問カード」にご記入ください。途中の休憩時間中に回収しまして、再開後の意見交換の際に皆様からの質問を取り上げることとしております。質問カードの記入と回収につきましては、会場外の受付のところに記入コーナーとして、筆記用具と回収ボックスを設けておりますので、こちらをご利用いただければと思います。

また、アンケートの記入に当たっては、サミット終了後、会場の外にアンケート記入コーナーを設けますので、そちらもどうぞご利用ください。

なお、サミットの進行を妨げるような行為は厳にお止めいただきますよう、お願いいたします。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

４　基調講演（中央大学名誉教授　細野助博）

（司会）

続きまして、今回のファシリテーターをお願いしております、中央大学名誉教授細野助博様より基調講演をいただきますが、その前に、細野様の経歴について、簡単にご紹介をさせていただきます。

細野様は、昭和 56 年に筑波大学大学院社会工学研究科博士課程を修了された後、平成７年から中央大学総合政策学部の教授をお務めになられました。その間、米国メリーランド大学大学院客員教授、日本公共政策学会会長、日本計画行政学会会長など多くの役職をお務めになられております。

また、細野様の大きな知見を頼り、多摩地域をはじめとする多くの自治体が長期総合計画の策定などでお力を借りております。本日の出席市では、国立市、立川市が長期総合計画の策定に細野様のお力を借りているところであります。

細野様は、現在、中央大学名誉教授のほか、公益社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩専務理事、美しい多摩川フォーラム会長、日本酒蔵ツーリズム推進協議会会長、財政制度等審議会分科会委員など、さまざまな役職を務められており、多方面でご活躍されていらっしゃいます。

本日は、大変お忙しい中、広域連携サミットのファシリテーターをお務めいただきます。

それでは、細野様、どうぞよろしくお願いいたします。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。わかりました。今日は９市の市長さんをお迎えしています。すごくパワーのある方ばかりなので、これからのディスカッションが楽しみでございます。

私はこれから、９市の市長さんたちと夢を語りたい。特に多摩について。多摩も、今、都心回帰と言われていて、何かだんだん元気がなくなりそうな、そんな状況にありますけど、そんなことでいいのでしょうかというふうに思うんですね。

私は 1988 年に、今でもありますけど、『東京人』という雑誌に「大学は再び都心を目指す」というものを書きました。そうしたら、編集長にとても怒られまして、「おまえ、今、どんどん大学は郊外へ行っているじゃないか」って。ところが合理的に考えると、やはり学生にとってはアルバイト先がいっぱいある。それから、ダブルスクールもできる。大学も、今の学生は下宿生よりも在宅生の比率が高い。自宅から来る学生たちをよりたくさん自分の大学に引き入れなきゃいけない。そうすると、都心のほうが交通の便もいいわけですから、学生は都心の大学へ行く。実際に予測した通りになりました。それで、2000 年にネットワーク多摩という産官学連携組織を全国に先駆けて作りました。このままでは学生ばかりでなく大学も、今度はどんどん都心に行ってしまう。今まで集積した大学の

施設をどうするんだ。

行政もそうです。後で申し上げますけども、男女共同参画社会になりました。参画社会ですから、後で職・住・保の距離を表す三角形を見せたいと思うんですけども。そうすると、どういうことになるのか。若い人たちほど都心のほうに行ってしまう。それをどういうふうに取り戻したらいいのかということ。ただし、夢は他力本願の白昼夢ではないのです。具体的な数字によって、どういう取り戻し方ができるか。こういう話を今日したいというふうに思います。皆さんとこれから、私の３つの夢というものをお話しながら、市長さんたちと熱く語りたいというふうに思います。

それでは、ちょうど 15 分ありますので、皆さんにお配りしている「連携・夢の物語」というものをご覧いただきたいと思います。これから人口に注目します。人口に注目するのは３つの理由があります。１つは、人口というのはとても大事で、需要をつくります。２番目は供給を支えます。３番目、若い世代を中心にして未来をつくってくれる。こういう非常に重要な要素なんですけども、残念ながら、日本は重要性に気付いて対策をとるのが遅くてどんどんその人口減少時代を突き進んでいます。人口数は急激に落ちます。そこで、どうするのかということを考えてみたいです。

まず、第１章、今日は「郊外時代よ　さよーなら」という話をしたいと思います。次のページを開いていただきますと、いろいろな要素があるんですけれども、突き詰めると３つになります。１つは、人口増加、郊外時代をつくったのは人口増加です。高度経済成長時代、１年に何と東京には 30 万人の人が地方からやってきました。30 万人が毎年毎年増えていくわけです。２年たてば 60 万人。すごいですよね、そうなんですよ。３年経つと 90 万人。これ、誰でも計算できますけれども、それがひとつ。

そうすると、やっぱり住むところが必要になりますから、住宅地の地価が上がっていきます。そうすると、どこか地価の安い所に行かなきゃいけない。当初は、東京都は、乱開発を防止するためにグリーンベルトをつくろうとしました。それが三鷹、府中、調布、このあたりですね。そのあたりの農家さんはとても反対しました。せっかくだから高くなった土地を売っていい生活をしたいと思ったわけです。ところが、防災面からも環境面からもそれはまかりならんと言われた。で、どうしたかというと、「万歳、チャンスが来た」と思ったのが多摩の地域です。炭焼きをやったりしていたんですけれども、もう、エネルギー革命時代が起こりまして炭焼きは続かない。そうはいっても、米をつくるような水田はないと。どうしようか、ゴルフ場をつくろうかといっても、ゴルフ場をそんなに多くつくることもできない。ちょうどその頃に住宅公団ができて、「おたくのところで住宅をつくらせてもらえませんか」って、「いいですよ」って言ったんです。公団の成功をはたから見ていた東京都が同じように開発にのり出した。ということで、その後公団と都の事業で日本を代表するニュータウンができた。多摩を代表として郊外時代というものが起こったんですね。

それと同時に輸送力がどんどん増強されました。例えば京王線だと、まず調布駅から京王永山駅まできて、その次は多摩センター駅、橋本駅まで来られるようになりましたね。そういうことがあって、郊外時代はバブルで絶頂を極めたんですけど、残念ながら、バブルが崩壊いたしました。そうすると、旦那の給料だけではやっていけない。奥さんも働か

なきゃいけない。共働きあるいは男女共同参画時代が来ました。旦那だけが行くんだったら、後で三角形を見せますけども、通勤に１時間半かかっても２時間かかってもいいわけです。家庭内分業しますから、奥さんは近くに幼稚園がちゃんとあればそれでいい。「じゃああなた、郊外へ行きましょうよ。安いんだから一部屋でも広くつくれますよ」ということになるわけです。ところが、男女共同参画社会になるとそうはいきません。奥さんも働かなきゃいけないし、保育園に子どもを送ってから職場に行かなきゃいけない。そうすると、三角形の二辺を短くすることを考えないといけない時代になる。なるべく時間が大事ですから、その移動距離を短くしようとすると、職場のある都心のほうに移ってしまう。こういうことになります。

たまたまバブルが崩壊して土地の値段が下がった、企業の遊休の土地がどんどん売り出された。さあ、タワーマンションをつくりましょう。規制緩和によって高さの制限も緩くなってきた。そうすると、比較的安い値段で都心のマンションを買えるようになるわけです。「都心にゴー」ということです。

そうすると、次のページ、これが今日皆さんにお話ししたいことなんです。次のページ、都心を目指す郊外人口。昨年、ネットワーク多摩で小池都知事をお呼びしました。都知事は何と知らなかったですね。多摩から毎日 90 万人が都心に行っているという現状を。ところが都心から多摩には９万人です。10 対１。

今日皆さんと議論したいことの一つは、この 10 対１、これは合理的でありません。人口は、23 区は 920 万人、多摩は 420 万人なので、おおよそ２分の１です。「ランチェスターの二乗法則」というものがありますけど、そうすると、１対２では、この法則で暗示される経済的パワーでいうと１対４になります。そうすると４対１というのが合理的なんです。そうすると、今が 90 万人と９万人、簡単に 100 万人としましょう、90 万人と 10 万人で 100 万人。では、この数字を４対１にするといくつになりますか。80 万人と 20 万人になります。つまり、今、ＪＲ、小田急線、京王線に乗っている人たちの数を同じとして考えますと、10 万人を何とか多摩のほうへ 23 区から通勤で来るような、そういう工夫をしなければ合理的とはいえないです。

そうすると、都市の経済学には、人口は職を求めて移動するという大原則があります。職を求めて移動する。つまり、10 万人をプラスするためには、多摩はベッドタウンよりもむしろ事業所を増やすということを考えないといけないということになります。事業所を増やすとどういうことが起こるかというと、昼間人口が増えてくるんですね。

ところが、資料の下のほうを見てください。昼間人口密度の比較をしますと、何と第１区分が密度が１万人未満、第２区分が２万人未満です。一番下のところは７万人未満、1㎢当たり。そうしますと、30 市町村はほとんど第１区分。多摩の地域が何とかしなければいけないのは、昼間人口増加ということです。

次のページ。ですから、今日お話ししたいことは、「ベッドタウンよ　さよーなら」と、そんなことできるのかと。今日はちょっとした夢を語りたいと思うんですけども、ベッドタウンからさようならをしたいということです。そのためにはどうするかということ。やはり定住人口を増やさなければいけないです。１万人定住人口が増えると、多摩のほうは 2015 年の国勢調査を見ますと、職場の近くに移動することを含めて 477 人転入が増えて

います。23 区は 550 人なので約 100 人多いですね。でも、プラスなんです。何とかして多摩のほうに定住人口を増やしましょう。どうするんだろう。さっき言ったように、人口は職を求めて移動するという話をしました。「ベッドタウンよ　さよーなら」とはそういうことです。この１万人増やすためには、三角形の長辺を短くする事業所をどうしても増やさなければいけないということになります。

次のページでは、30 年で区切って人口の増加率を出しました。1980 年から 2010 年と 2010 年から 2040 年、2040 年にはまだなっていませんけれども予測を入れました。30 年の人口予測はかなり正確です。市長さんたちもご存じと思います。来年、再来年という単位では予測は難しい。一つでもマンションができたりすると、ぐっと人口が増えたりしますから難しいですけど、30 年というスパンで考えるとかなり予測ができます。そうしますと、23 区は 1980 年から 2010 年で 0.21 プラスでした。それが 2010 年から 2040 年は 0.17 プラスです。低下していてもプラスです。ところが、多摩の場合は、1980 年から 2010 年は 38％ぐらい伸びたんです。それが今度はマイナスになってしまう。ほとんどのところがマイナスとなり、これは課題です。どうしたらいいだろうかと。資料の下のところは、９市も含めた形で 30 市町村がそれぞれ５つの市町村の区切りで出ています。ご自分のところがどこの区分に入っていますか。第５区分が一番大きな区分。しかも、この第５区分の成長率が高いところになります。そうすると、多摩のなかでもかなり大きいまちに人口が集中し出しているということになります。

はい、次のページです。

さっき男女共同参画社会と言いましたが三角形を持ってきました。家庭内分業があったときに夫が考えるのは、三角形の長辺、「住」と「職」の斜めの線ですね。これだけを考えればいいわけです。旦那はこの長い線を毎日通勤でえっちらおっちら行くわけです。女性のほうは「住」と「保育」ですから、縦の垂線ですね。ここのところを行きます。一辺ずつ考えればよかったのです。だから、「もう一部屋欲しいな。だったら都心からもうちょっと遠いところに行こうか」こういうことになるわけです。ところが、男女共同参画社会になりました。男性も女性も、特にイクメンの男性がそうですが、二辺を考えないといけないわけです。垂線と長い長辺ですね。足し算を考えなければいけない。そうしたら時間価値もだんだん高くなります。女性も「私、働くとこんなに給料もよくなるのか」そうしたら、保育ばかりやっていられない、旦那の給料ばかりにすがることができない。そうすると、両辺を考えるようになります。男性も女性も。そうすると、小さな三角形にしないといけない。

その結果が資料の右のほうの 23 区と多摩の東京都の地図にある団塊の世代の数が丸の大きさで出てます。これは人口に占める団塊の世代の比率が高くなればなるほど赤くなります。これ見るとわかりますように、都心のほうにどんどん若い人たちが移動している。若い人たちをどういうふうに取り込んでいくかを考えなきゃいけない。

あと、２，３分ですので、後で読んでおいていただきたいですけども、「働き方を変える「夢」」というところを見てください。何が書いてあるかというと、テレワーク。期間中は都心に働きに出るなという 2020 年のオリンピックって一つのチャンスだと思っています。テレワークを普及させよう。何も都心まで１時間半とか１時間かけて、混雑率 150％

で行く必要ないわけですよ。ね、働き方を変えてテレワークをやりましょう。それから、もう一つは、コワーキングスペースです。シェアオフィス、これもやりましょう。つまり、ライフスタイルを変えて働くということを多摩で提案しようじゃないですか。これが私の夢の１つ目です。後ほど市長さんたちから、「そんなことできるか」という話があるかもしれません。これは私の提案の１つ目です。よろしくお願いします。

次のページに、９市のそれぞれのすばらしい景色の写真をよそ者としての私がピックアップしました。「いや、もっといいのがある」とおっしゃるかもしれないけど。どの写真がどの市か皆さんご存じだと思います。それで、地価の上昇はやはり大事です。地価の上昇は自治体財政の屋台骨でもあるわけです。そのとき一番大事なものは何かというと、１つは固定資産税です。そうすると、さっき私は、１から７段階で昼間人口の密度を言いました。昼間人口の密度が高くなると、どれぐらいその地価が上がるかというのを住宅地と商業地で推計しました。あと１分ぐらいしかないですから、私はここでお話は終わりますけども、基本的に言うと住宅地よりも商業地の地価のほうが、昼間人口密度によって大きな違いが出る。23 区と比べて、多摩のほうの上昇率が高い。だから事業所を増やして、昼間人口を増やしましょうよと、こういう話です。

連携の夢の２つ目、９市の人口を足し算すると、ちょうど 100 万人なんですよ、皆さん。100 万人のパワーはものすごい。多摩の人口は 400 万ですから、その４分の１です。25％もある。その 100 万人の力をどうやって発揮していくかということを皆さんと一緒に考えなければいけない。

はい、ちょうど私は 20 分の時間を守りました。ですから、市長の皆さんにもぜひ時間をお守りいただきたいということになります。これで、私のお話を終わりまして、第三の夢である連携について、これから皆さんと一緒に市長さんたちとの話し合いを楽しみたいと思います。では、よろしくお願いいたします。

（司会）

ぴったりのお時間でありがとうございました。時代が変化とともに変わるさまざまな課題について、また、夢についてお話しいただきました。

５　意見交換

（司会）

それでは、これから意見交換に入らせていただきたいと思います。

これ以降の進行を細野様にお願いしたいと思います。では、引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。わかりました。はじめに、本日の意見交換の進め方ですけども、簡単に申しますと、サブタイトルに「～魅力なくして連携なし～」ということを書かせていただきました。これには２つの意味があります。連携は、魅力がなければ実現しません。どういう連携によってどういう魅力が出てくるのかというのが一つです。もう一つの魅力については、各市が 100 万人のパワーを発揮するために注力する自分たちの魅力はこれだということを連携の中で積極的に出していただきたい。民間でもその連携は結構あるんですけれど、ほ

とんど失敗です。なぜか。ローカリズムに陥って、自社の大事なノウハウを出さない。大事な人材を出さない。これでは失敗するのは当たり前です。だから、日本の経済はどんどんだめになって30年目を迎えているわけです。ここではぜひこういう話をしていただきたいと思います。

１人５分でございますけれども、まず、立川市長からお願いしたいと思います。いつもお約束を守ってくださるので、安心してマイクをお預けしたいと思います。それでは、よろしくお願いいたします。

（立川市長）

トップにご指名をいただきました。大変誇らしいと思っておりますが、５分以内で何とか収められればと思っています。

まず、立川市が持つ魅力、あるいはこの必要性などについて申し上げますと、立川市は、平成27年度から令和６年までの10年間を計画期間とする第４次長期総合計画におきまして、「にぎわいとやすらぎの交流都市」、相反する命題でございますが、あえて「にぎわいとやすらぎの」という言葉を使いました。「交流都市　立川」を将来像に掲げています。交流都市ということは、人の行き来ということでございまして、「にぎわい」の根本であろうかなというふうに思っております。

ＪＲ立川駅を中心として、立川が多摩の交通の要衝として発展を遂げ、北口には大型店が立ち並び、南口には飲食店や物販店舗などの非常に魅力的な個店が充実しています。また、近年では、複合型のショッピングセンターやスポーツアリーナもオープンするなど、大変多くの方が訪れております。

一方、砂川地域、立川の北部でありますけれども、東西に広がる農地や、残堀川、玉川上水など、この農地に関しましては、東京都の区市町村の中で多摩地域ではトップクラス、自然や緑といった潤いに満ちた空間が北部のほうに広がっております。身近にやすらぎを感じることができるわけであります。

特に、日本を代表する国営公園であります昭和記念公園、これは東京ドーム39個分という大変広い、約180haの広さ、広い面積を持ち、広大な敷地に四季折々の植物を楽しむことができるということでございまして、年間 400 万人以上が訪れるという公園であります。

このように「にぎわい」と「やすらぎ」という、一見矛盾する二面を兼ね備えた魅力があるのは、本市の特徴であると考えております。

こうした中で、平成 30 年度の１年間の立川駅周辺の来街者数でございますけれども、約 4,200 万人です。本日の９市を核とした多摩地域における中心的な交流都市になっております。

また、宿泊施設におきましては、多摩地域でトップクラスであることも大きな特徴の一つであります。市内にあるホテル・旅館の合計客室数が 2,000 弱ということでございま

す。国内外から宿泊を伴ったビジネス、あるいは観光目的の来街者も多くいらっしゃいます。

また、働く場所といたしましては、大変多くの方々がお越しをいただいておりまして、通常の人口に通勤通学の流入出を加味した人口である昼夜間人口比率は 114.2%と多摩地域 30 市町村で最も高くなっております。これは 23 区と比較しても上位に位置しておりまして、目黒区の 105.8%、墨田区の 108.9%よりも大きい数字となっております。

このように、立川は、訪れる場所、泊まる場所、働く場所としてお選びいただいていることが本市の大きな強みとなっているわけであります。

一方で、今年の１月に発表した人口動向におきましては、立川市においても総人口は、2025 年、あと５年後でありますけれども、減少局面に入り、今後 42 年間で約 13%減少する見込みという試算がございます。また、流入出の移動状況におきましては、多摩地域や埼玉、千葉、神奈川の近隣３県、そのほかの地方圏に対しては、いずれも転入超過でありますけれども、東京 23 区に対しては転出超過ということになっておりまして、人の流れは、人の集まるところ、より魅力のある都心に向かっているところでございます。流れとしては、将来的には、立川の人口が減っていってしまうだろうという大変憂慮すべき方向が垣間見えてきたところでございます。

以上で５分間でございます。ありがとうございました。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございます。時間を守ってくださり、どうもありがとうございます。続きまして、昭島市の臼井市長、よろしくお願いいたします。

（昭島市長）

皆さん、こんにちは。昭島市長の臼井伸介でございます。広域連携サミット、このような機会をつくっていただいた立川市長さんにお礼申し上げます。また、細野先生もありがとうございます。

昭島市としては、今、ちょうど秋ですから、文化芸術の連携、そして、スポーツによる連携ということで取り上げさせていただいたところでございます。本市におきましては、本年６月に昭島駅北口、ちょうど先生が９市をピックアップした写真の中で、国立市さんの赤い三角駅の下にあるところが、昭島駅北口にあるモリタウンでございます。その北側にフォレスト・イン昭和館というホテルがあり、そのホテルのところにたまたま大理石彫刻家として大変有名な武藤順九先生がお泊まりになられました。そこのホテル北側に隣接して大変広大な樹林地がありまして、朝食後散策しているときに、「あ、ここは何か妖精が住んでいる。」私には見えないですけど、先生には見えたということで、大変気に入っていただいて、ここを彫刻園にしたいと思ったそうです。そこは企業の所有地ですので、企業さんと昭島市と彫刻家、三位一体で彫刻園をつくっていこうということで、昭島・昭和の森武藤順九彫刻園を今年の６月に開設させていただきました。

先生は主に大理石彫刻家としてイタリアで活動されておりますが、イタリアの聖パウロさんがいらっしゃるところとか、あるいはニューヨークの 9.11 のテロがあったところの慰霊碑を２ｍぐらいの大きい大理石で彫刻されたり、また、ブッダガヤでも彫刻を展示されています。来年に開かれる、ドバイの万博で、世界の 10 人の彫刻家の一人として選ばれている先生でございます。その先生の彫刻園が、６月に開設されまして、９つの彫刻が今、そこに展示されております。大変多くの方にご来場していただき、私も大変うれしく思っているところでございます。

そういった中で、昭島市も魅力を発信できたということで、今後、各市におきましても、特色あるような希少な文化や、そして、また、芸術関連の資源がまだまだ存在していると思います。芸術作品を身近に鑑賞できる機会を提供することや潤いや安らぎを感じられる文化芸術施策の推進を図ることは、各市共通の想いではないかと思っているところでございます。

そういった意味で、各市の特色ある文化芸術関連の資源を共有し、相互に情報発信することによって、「この９市って文化的にいいよね」、「芸術的にもちょっといいじゃない」と言われるような、そうした９市になっていくことが大事かなというふうに思っています。

スポーツの分野におきましては、６月 29 日に秩父宮ラグビー場で開催されました、ジャパンラグビートップリーグカップにおいて、昭島市に昨年来た栗田工業のウォーターガッシュと日野のレッドドルフィンズで、多摩川若鮎ダービーを一緒にやろうと、秩父宮で日野市の大坪市長さんと、お互いに応援団長をやりました。こうした連携もいいのかなと、ラグビーにも力を入れていこうと思いながら、今年の９月 28 日に、アイルランドと日本戦のパブリックビューイングを開催させていただき、昭島市にこんな人口がいたのかなというくらい会場がいっぱいになりました。こういうスポーツを通じた連携も大事かなと思います。

ありがとうございました。

（ファシリテーター細野名誉教授）

助かりました。

続きましては、小平市の小林市長、よろしくお願いいたします。

（小平市長）

小平市でございます。小平市といいますと、やはりグリーンロードになるわけであります。このグリーンロードというのは、国指定史跡の玉川上水、それから、野火止用水、狭山・境緑道、小金井公園を結ぶ緑の回廊で１周 21 ㎞でございます。２回周ると 42 ㎞ で、ちょうどフルマラソンのコースになりますので、ぜひ一度お試しをいただければと思います。それで、このグリーンロードは、起伏が少なく、散歩道、散歩するにはとても良い場所でございます。美しい日本の歩きたくなる道 500 選、新日本歩く道紀行 100 選『水辺の道』、これらの指定を受けて多くの皆さんに

楽しんでいただいております。

グリーンロードの周辺には、ＪＲを含めて駅が大変多くありまして、どの駅からもこのグリーンロードに入ることができ、また、抜けることもできる、とてもすばらしいコース取りになっています。ゆっくりと散策ができ、小平市のさまざまな魅力スポットがこのグリーンロードの周辺に点在をしています。

ちなみに申し上げますと、先ほど彫刻の話が出ておりましたが、まさに日本近代彫刻の先駆けを担われた平櫛田中彫刻美術館、それから、小平ふるさと村、これは、江戸後期の農家の家をそのまま移築をしているところであります。ふれあい下水道館、これは日本で唯一、生の下水放流が見られるところであります。それから、こもれびの足湯、これは、ごみの焼却場の場所に隣接をしており、余熱を利用したものでございます。それから、歴史的な資源、文化財といたしましては、小平市は、石神井川の最上流、もっと具体的にいいますと、小金井カントリークラブの辺りが最上流でございますが、その石神井川源流部に営まれた旧石器時代を代表する遺跡の一つである鈴木遺跡は現在、東京都指定史跡であり、現在、国指定を受けるために、取組をしているところでございます。

さらに、市内には多くの大学、専門学校があり、若者が集まる学園都市になっております。ちなみに、小平市には、嘉悦大学、職業能力開発総合大学校、白梅学園大学・白梅学園短期大学、津田塾大学、一橋大学、文化学園大学、武蔵野美術大学の７つの大学等がございまして、大学連携協議会を設けてさまざまな連携を行っております。各大学とは連携協定を結びながら、いろいろな事業をやっており、この７大学等が連携して学生さんを中心に、イベントなどをしながら、小平市の若者にとって住みやすい、魅力あるまちにしていくにはどうやったらいいのか等々、各大学等の学生さんたちが集まっていろいろテーマを出し合ってやっているところでございます。

さて、小平市は、名前のとおり、平らで、山がない、川がない、海がない。ですから、今回のこの台風でもほとんど影響がございませんでした。そういう意味では、若い、これから土地を求めて移り住もうと思われる方につきましては、ぜひ小平市にお越しいただきたい。

以上でございます。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございました。

続きまして、日野市の大坪市長、よろしくお願いします。

（日野市長）

日野市長の大坪でございます。本日は、こういう発言の機会をいただきまして、誠にありがとうございます。

まずは、日野市の魅力ということであります。いくつかあります。まず、何といっても、日野市は新選組のふるさとであります。全国に発信しております。幕末を駆け抜けた新選組の副長の土方歳三、六番隊隊長井上源三郎らが生まれ育って、剣術修行を積んだまちであります。毎年５月には、その土方歳三の命日にちなみ、新選組まつりを日野駅周辺で行いますが、全国から多くの新選組ファンが駆けつける。日野市内には新選組のふるさと歴史館など、いくつかの新選組関連施設がたくさんございます。多くの方が訪れていただい

ています。今年は、その土方歳三が箱館（函館）で戦死してから 150 年という、没後 150 年にちなんだシティプロモーションを進めているところでございます。ちなみに、この缶バッジはそのためのバッジでございますので、ご希望の方はどうぞ。

それから、もう一つ、日野市の特徴、都内有数の観光資源があります。まずは、関東三大不動と言われる高幡不動尊、それから、都立の施設でありますが、多摩動物公園は日野市内の施設であります。それから、京王百草園など、都内を代表する観光資源があります。

それから、日野市の特徴として、非常に交通利便性が高いまちでございます。ＪＲ中央線、京王線、多摩都市モノレール、この３路線で合計 12 の駅があります。いずれも連携がよくて、新宿まで 30 分ぐらいで到着すると、都心部へのアクセスがいいのが日野市の特徴でございます。

もう一つは、日野市は、浅川・多摩川という川がありますけれども、多摩川に架橋した橋が３つあります。３つあるのは日野市ぐらいかなと。ただ、一つには、残念ながら、台風 19 号で日野橋は損傷しておりますけれども、いずれにしても近隣のまちへのアクセスが良いということでございます。

それから、今言ったことと重なりますが、多摩川・浅川という一級河川、それから、市内 116 ㎞にわたる用水があります。昔、米蔵がありましたので、その名残で用水がある。そして、湧水に恵まれている水の都という、非常にすぐれた自然環境があります。そして、多摩丘陵の豊かな緑があります。丘陵地があるため崖地が多いので、土砂災害警戒区域、レッドゾーン、イエローゾーンが 388 カ所一方でありますが、今回は置いておきます。

それから、日野市は、大学や企業などの立地に恵まれている。市内に大学は３つあり、明星大学、実践女子大学、首都大学東京、それから、市外の東京薬科大学とも色んな連携協定が結んでいる。そして、企業９社とも、活性化や地域課題の解決に向けた協定を締結して、さまざまなテーマで地域活動を展開しております。

その上で、広域連携の取組としては、図書館の相互利用であるとか、それから、多摩川流域の自治体の連携、それから、住民情報システムの共同利用も進めております。それから、南多摩５市のオープンデータの取組を行っている。そして、今年７月１日に東京都内初のＳＤＧｓの未来都市に選定をされました。市民・企業・行政の対話を通した生活・環境課題産業化で実現する生活価値（ＱＯＬ）の共創都市、ともにつくっていく都市を目指しております。

そんなことが日野市の特徴でございますが、一方で、課題はたくさんございます。日野市の課題としては、リーマンショック後に相次ぐ大規模工場が転出していった。一時は工業製品出荷額都内１位でありましたが、今は、２位に落ちました。ものづくりのまちからの転換が求められている。人口も、先ほどありましたように、2025 年をピークに減少に転じることが予想されております。団塊世代の人口が多いことから、これから、医療、介護の問題の深刻化、そして、特に日野市では、市内南部の丘陵地での高齢世帯の集中、高

齢化、そして、空き家の増加も課題であります。

その上でどんなことを、圏域の魅力向上を連携の上でやっていったら良いのか。先ほど細野先生の話にもありましたように、多摩地域は、いわゆるベッドタウンであります。ただ、今後は職住近接を目指す環境の中で、子育て、介護のしやすさ等を追求していかなくてはなりません。

ただ、今後は既存の企業立地、産業の多様性を軸とした経済的基盤、それから、みどりや水に恵まれた豊かな自然環境と生活利便性を兼ね備えた暮らしの基盤があります。それらをつなぐ生活の質を実現することができれば、好循環を生み出すことができるのではないかと思っています。

そのためには、各市がそれぞれの強み、弱み、課題を共有して、それらを生かした連携を行いながら、連携の質の向上を図っていく。それぞれの強みを組み合わせて役割分担することで、職住近接などの多摩地域全体の価値を高めていく、そんなことをやっていくべきだと思っております。

以上であります。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございます。大体５分プラス 1.5 分ぐらいですね。ちょっと急ぎましょう。

次は、国分寺市の井澤市長、よろしくお願いいたします。

（国分寺市長）

国分寺市でございます。

国分寺市は、現在、人口が引き続き微増傾向でありまして、日経ＢＰ社の調べによりますと、平成 30 年の１月から 12 月までの間、人口増加率は全国で 36 位、都内で５位、多摩地域では１位ということになりました。このような結果になった背景には、市には、新旧のさまざまな魅力があって、その発信を積極的に行ってきたことがあると考えています。ここではそのいくつかをご紹介したいと思います。

昨年は、非常に時間がかかりましたけれども、おかげさまで国分寺駅北口再開発の東西２棟のビルが竣工いたしました。本市の新たな魅力となるランドマークが誕生し、また、多くの方に訪れていただいております。

今年度は、市制施行 55 周年を迎える節目の年でもありますので、各関連イベント等を通じて、市の魅力を発信していきたいと思っております。古くからの魅力としては、ご存じのように、全国に 64 ありました国分寺のお寺があったところであります。1300 年ほど前でありますけれども、国指定史跡武蔵国分寺跡、これは国の史跡指定を大正 11 年に受けておりまして、現在 97 年経っています。この僧寺伽藍中枢地区は、平成 23 年度からの整備工事が昨年度で完了いたしまして、歴史公園として開園をしたところであります。面積は、東京ドームの大体５倍の面積があるということでございます。

また、歴史を生かした新たな魅力といたしまして、地場産の農畜産物を「こくベジ」としてＰＲしております。とりわけ三百年野菜ということで、江戸の享保の時代から新田開発が行われ、農業が盛んになったということでございます。多摩地域は、江戸時代の新田開発、全体がそうでありますけれども、国分寺においても、そういう農業や用水等も、自然もまた共通する魅力というふうに考えておりますし、国分寺でも積極的に農業の育成を図っていくということであります。

加えて、近年、力を入れている取組といたしましては、地域活性化包括連携協定を企業さんや大学さんと結びまして、市民サービスの向上や魅力発信などにつながる取組を進めております。令和元年10月末現在で、16の団体と締結しております。多摩信用金庫さんはもとより、国分寺市内には、実はリオン株式会社という補聴器の会社がございますけれども、ここがベトナムと非常に強く結びついているということで、東京2020オリンピック・パラリンピック大会に向けて、私どもはベトナムのホストタウンとして、このリオンさんのつながりも含めて取組を進めているところであります。こちらからは、ベトナムの国立交響楽団蓮の香弦楽四重奏団のコンサート等をやりまして、ご協力をいただいたという実績がございます。また、もう皆さんご存じだと思いますけれども、地域の放送局であるＪ：ＣＯＭ東京さんとのナショジオオープンキャンパスの開催、また、株式会社日立製作所研究開発グループさんとの勉強会、これはSociety5.0というテーマをもってやっておりまして、成果発表の場が実は昨日ございました。これからもこのような魅力を活用した取組を行って持続可能な市政運営に努力してまいりたいと思っています。

企業、大学等と複数市で連携した取組を行いまして、公民連携と広域連携をつなげることで、魅力を今以上に高めるとともに、民間との連携による新たな魅力を見出すことができると考えています。もちろん近隣市の連携はより一層強めてまいりたいというふうに思っております。

公民連携に着目した理由といたしましては、企業、大学等は、行政区域とは関係なく活動されておりまして、独自のネットワーク等を持っておられます。各自治体の持つ地域資源としての魅力と連携させることで、広域連携の新しい形を生むことができると考えるからでございます。

例えばちょうど、先ほど申し上げましたように、デジタル多摩シンポジウム2019in国分寺を昨日開かせていただきました。人視点で将来のデジタル化した地域の姿を考えるというシンポジウムがありまして、市内に中央研究所を有する日立さんと開催したところであります。このシンポジウムは、超スマート社会と言われるSociety5.0や、193の国連加盟国全てが合意しているＳＤＧｓと言われる持続可能な開発目標、昨今、自治体としても取り組んでいく必要があることについて、人視点での取組について、デジタル技術と市民参画の視点から考える場となりました。

以上でございます。

（ファシリテーター細野名誉教授）

ありがとうございました。

続きまして、国立市の永見市長、よろしくお願いします。

（国立市長）

皆さん、こんにちは。国立市長の永見です。細野先生、大変お世話になっておりまして、ありがとうございます。細野先生が書いた『二都物語』を読みまして、大変ショックを受けて、今日再び最初の 20 分の講演で、同じようなショックを、2 回パンチを浴びたという感じでございます。このパンチをかいくぐって、何とか活性化していかなきゃいけないんだって思っているところです。

その上で、国立の魅力って何かと。で、まずは発信してくれということなんですが、8㎢、8.15 ㎢しかない、小ささだということが魅力なんだろうと思います。国立の中心から 30 分歩けば、国分寺にも、立川にも、府中にも、日野にもたどり着けるというようなことでございますので、この小ささの中で何ができるのかということを考えないと、国立は埋没するというふうに考えております。

その意味では、私たちが誇りを持っていることと、外部の人たちが国立をどう見て、何を魅力と感じてくれているのかということを常に気にしております。そんなことを含めて、いくつかお話をしたいと思いますけれども、国立の魅力で、国立は、都市像「文教都市くにたち」というふうに言っておりますけれども、この文教都市くにたちという中には、非常に良好な住宅街、それから、自然環境と歴史を持つ南部地域、そして、魅力的な個店ですね、店舗、いわゆるチェーン店ではなくて店舗がある。そのかわり一方では、産業とか、観光とか、娯楽という面では非常に劣る部分があって、一方で、芸術文化というところは強みがある。こんなことが総体的な国立の魅力なのかななんて思っておりますけど、もう少し細部的にいいますと、実は、今年の春先にイタリアのルッカ市から首長さんがお見えになりまして、国立市内を歩いております。「国立の魅力、何ですか」と言ったら、イタリアの古都ですから、ローマ時代から続くまちの市長です。~~あ、~~昼間からパチンコをやっているまちは嫌いですと言うんですね。で、国立にはそういう施設がない。ですから、娯楽施設はないんだけれども、落ちついた街並みとロマネスク調の建物があって、まだ駅舎はできていませんでしたけども、そういう街並み、そして、大学通りに大変魅力を感じるという。これが一市長ですけれども、そういう魅力を感じていただけたと思っております。

そして、歴史、文化、自然という意味では、つい先日、平和首長会議やらせていただきましたが、イタリアレストランがお店を出していただきました。個店です、全部。そこで、それぞれの味を競っていただいた。そういう意味では、かなり食文化が~~か~~進んでいるまちだろうと思っております。

それとともに、ギャラリーネットワークが大事です。ギャラリーがものすごくたくさんあります。そういう意味では、常に絵画とか、そういうことに触れられる。民間で触れられる、こんなまちだろうと思います。

加えて、谷保天満宮、あるいは本田家というのがありまして、これは新選組の土方さんたちともつながりがある旧庄屋さんなんですけど、そういう歴史的な価値がある。そし

て、崖線、水田ですね。そういったものがある。

で、こういったことが一般的な魅力であります。あわせて、ソフト的にいいますと、実は地域包括ケアがやはり国立の誇りだと思うんです。今まではおそらく高齢社会にどう立ち向かっていくのかというのを、ハード面とか、産業面とか、まちづくりだけ考えていますけど、ソフトにおいてどうやってこれに対応していくのか。今日も、慶應大学から、埼玉県立大学理事長になられた田中滋さんとお話ししたんですが、まあ、そういう包括的なことにはそれを支える人材が要る。そして大学がある、これが国立の魅力だろうと思っています。そうすると、国立の持っている魅力を地域へ広げて、多摩地域にどうやって連携していけるかといったときには、前から僕はサミットで言っているんですけど、瀬戸内芸術祭ではないんだけども、広域で芸術祭を開くぐらいのパワーがあって、インバウンドのお客さんがＪＲ使ってどんどんどんどん来ていただいて、そして、そこで芸術文化を楽しんでいただける、このくらいのことは一つできていいんじゃないのか。

それから、もう一つは、これは東大の小泉先生とお話ししたんですが、やはり先ほど細野先生もおっしゃっていたんですが、テレワークをどうやって産業基盤として定着させるか。そういうようなことをやっていくと、三多摩地域の、国立も含めてなんですが、産業基盤が弱くても十分住の魅力があるから、それはできるでしょうと。それをどうやっていくかということを検討していくことが肝ではないかと言われております。そんなことを皆様とできたらいいなと思っております。

以上です。

（ファシリテーター細野名誉教授）

ありがとうございます。

続きまして、福生市の加藤市長、よろしくお願いします。

（福生市長）

福生市でございます。よろしくお願いいたします。

今、国立の永見市長が市の面積の話をしたように、8.15㎢と。私どもの福生市は、10.16㎢ですから、ちょっと大きいかなって思われるかもしれませんけども、よくこれ、ここでお話をさせていただきます、３分の１は横田基地に提供しておりますので、7㎢弱、東京都の中では狛江市に次いで小さな自治体でございます。そこに今、６万人近く住んでいるということで、人口密度だけは高いんですけれども、おかげさまで、その小さなコンパクトなまちの中に５つのＪＲの駅がございますので、大体どこからでも15分以内で最寄りの駅に行けるという利便性はよいまちだというように思っております。

そして、良くも悪くも横田基地と共存しておりますので、基地のまちだというふうに、ある意味、負のイメージがついて回っている市でございますので、横田基地の友好祭というのはもうつい最近終わったんですけども、今年は15万人ぐらい、日本全国各地からお見えになっていただいていますが、そういう華やかな部分もいいんですけれども、もう帰

りましたけれども、グローバルホークが来たり、オスプレイが配備されたりして、苦情が参るのも福生市でございます。そして、ゲートが開いているものですから、米兵のちょっとした始末、不始末みたいなものも、全部福生市がある程度受け持っているという状況でございます。

しかしながら、ある一面では江戸時代から続いている２つの酒蔵がございます。田村酒造場、石川酒造というのがございまして、その酒造の間には玉川上水が流れて、100 近くの蔵が点在するという昔ながらの里山の風景がある、垣間見えるまちでございますので、非常にコンパクトなまちの中での和と洋を味わっていただけるんだということでございますので、ぜひおいでいただければというふうに思っています。

ただ、その先ほど負の印象があるというふうな横田基地でございますけれども、なぜそういう形になるかということになりますと、やはり騒音被害、あるいはトランプ大統領、つい最近お見えになりました。それから、副大統領、国務長官も来るんですけれども、必ず横田基地においでになるんですね。そうすると、その警備で大体市内で１万人ぐらいの警察官でごった返していますので、もうそうなると、やっぱり交通渋滞が起きたり、さまざまな部分で人はやっぱりちょっと嫌な部分もございます。

しかしながら、このまち、非常に国際色豊かなまちでございますので、約 60 カ国の方が住んでいます。そして、6.5%、市の人口に対して外国人比率がそれぐらいありまして、約 3,800 人ぐらいの方がお住まいになっています。ですから、行政としましても、結構大変なところでございまして、市内で 14、５の言語がありますので、そこに対して窓口では 13 言語で対応させていただいていますけれども、これでもやっぱり足りないということで、今、チャットボットというロボットの実証実験を検討しまして、スマホをかざしていただいて、そこで話をしていただくという部分を今、実証実験をしようとしているところでございます。いずれにいたしましても、国際都市だと思っていますので、ぜひこの部分を伸ばしていきたいと、そういうふうに考えてございます。

以上でございます。

（ファシリテーター細野名誉教授）

ありがとうございました。

続きまして、東大和市の尾崎市長。

（東大和市長）

皆さん、こんにちは。東大和市の尾崎でございます。

まず、当市の概要につきまして、簡単にご説明をいたします。

東大和市は、東京でありながら、豊かな自然があるまちで、その特長である環境を生かしながら、平成 27 年度から「日本一子育てしやすいまちづくり」を目指し、子育て世帯を応援する施策を重点的に推進しております。その結果でありますが、日経デュアルによる共働き子育てしやすい街に関する調査では、全国の自治体の中でも上位に位置し、子育てのしやすいまちとして一定の評価を得ているところで

ございます。また、平成29年の合計特殊出生率につきましては、1.59ということで、都内の区市部におきましては、第１位となっております。さらに、今年度からは、「シニアが活躍できるまち」も目指し、シニア世代が持つ知見や経験を生かし、市民と行政によるまちづくりを推進しております。

それでは、当市の広域連携に資する地域資源につきまして、ご説明をいたします。

まず初めに、豊かな自然としましては、日本経済新聞社が実施した何でもランキングにおいて、「春風と花を満喫　レンタサイクルで楽しめる桜名所 10 選」で第４位となった多摩湖を含む狭山丘陵、そして、野火止用水や空堀川などがあります。これらの豊かな自然は、東大和市の緑と水のシンボルであり、当市におきましては、市内の自然を見ながら回遊できるよう、緑と水のネットワーク創出に取り組んでいるところであります。

文化財等としましては、貴重な戦災建造物であります、旧日立航空機株式会社変電所や国の登録有形文化財であります、日本画家・故吉岡堅二画伯邸、それから、都内に現存する最古の神社本殿であり、東京都の指定文化財でもあります、豊鹿島神社、そして、プラネタリウムを併設した郷土博物館などがあります。また、地域の特産品としましては、狭山丘陵がもたらす自然の恵みを生かした狭山茶や多摩湖梨等があります。

そして、観光や産業に関するイベントとしましては、今年約８万 6,500 人ほどの方が訪れたうまかんべぇ～祭や、また、昨年は約４万1,000人の方が訪れた、今年は明後日の11 月３日、４日に開催される東やまと産業まつり、そして、市内の人気スイーツを食べ歩く、ひがしやまとスイーツウォーキングなどがあります。これらの観光、産業イベントは、地域住民の交流を促進するとともに、市外からも多くの方々が訪れるため、にぎわいの創出につながっております。

また、スポーツの名所としましては、マラソンやサイクリングに最適な多摩湖の周辺が挙げられます。多摩湖は、日本初の女子フルマラソン大会の発祥の地でもあることから、週末になりますと、マラソンやサイクリングを楽しむ方々が多く訪れております。当市においては、これらの地域資源をもとに、自然や文化財等をめぐる回遊性のあるまちづくりを目指しております。

続きまして、各市の地域資源を生かして、９市における地域の魅力向上を図る取組についてでありますが、これまで各市長さんから、それぞれの市の地域資源のお話を聞いたわけでありますが、やはり各市それぞれが自然や文化財、名所などの魅力あるすばらしい地域資源を持っていると感じたところであります。９市それぞれの持つ魅力あるすばらしい地域資源を回遊できるような取組を行うことで、圏域全体の魅力を肌で感じてもらうことが可能であると考えます。

具体的には、１点目として、豊かな自然、文化財、観光産業イベント等の地域資源の連携としまして、観光産業を目的とした合同イベントの開催が考えられます。９市エリアの観光拠点や来場者が多く見込めるイベントなどを周遊することで、家族や友人同士が楽しみながら、圏域の魅力を肌で感じていただける機会になるのではないかと考えております。

２点目に、特産品等の地域資源の共有としまして、９市エリアの特産品を持ち寄ったマルシェの開催が考えられます。９市の駅前広場や各市のイベント等を活用したマルシェ

を開催し、多くの方々に特産品を知っていただくことで、食を通じて地域の活性化やこの圏域での居住への関心が高まるのではないかと考えております。

続きまして、圏域の魅力の発信方法についてでありますが、９市のそれぞれの地域資源や魅力を各市が単独で情報発信するには限りがあります。９市の圏域として全体で魅力を発信することで、スケールメリットによる認知度の向上や来訪者の集客が見込めるものと考えます。

具体的には、各市や東京都が持っている観光関連スペースや、ＳＮＳを活用し９市の魅力を広く情報発信する方法や、９市圏域の観光マップやグルメ情報誌などを作成し、多くの方に手に取っていただく方法等も魅力発信に有効であると考えております。

当市としましては、これらの連携を行うことにより、９市エリアにお住いの方々も、それ以外の方々も住みやすさを実感していただくことができ、圏域のさらなる魅力向上と地域活性化につながるものと考えております。

以上でございます。

（ファシリテーター細野名誉教授）

ありがとうございました。もう第２ラウンドの結論を出していただいたような感じですけれども。最後ですね、第１ラウンドの最後は、武蔵村山市の藤野市長、よろしくお願いいたします。

（武蔵村山市長）

武蔵村山市の藤野です。持ち時間が４分ほどしかありませんので、簡単にお話をさせていただきます。

武蔵村山市は、昭和 45 年 11 月３日に市制施行しました。ということは、来年の 11 月３日には市制 50 周年。東大和も一緒ですが、大変若い市であります。武蔵村山市は、当時町の時代、昭和 34 年にプリンス自動車工業を誘致しました。工場誘致条例というものをつくり、昭和 34 年にプリンス自動車を誘致して、そして、昭和 38 年か９年に日産自動車に合併されて、それから、日産自動車村山工場が 140 haの土地をもって車を造っておりました。ケンとメリーの愛のスカイラインなど、スカイライン GT-R の発祥の地でもあります。ところが、武蔵村山市の人口はなかなか増えなかったのですが、都営村山団地 5,260 所帯を誘致したおかげで、昭和 45 年 11 月３日に３万人の特例市として市になりました。

そして、市になってから、私が役場の時代に職員として採用されてから公務員生活を長く送り、今、市長３期目をやらせてもらっています。武蔵村山市の市長になって３期目は無投票でした。自慢をするわけではありませんが、武蔵村山市民というのは、先ほど福生の市長がＪＲの駅が５つもあるとか、大学がいくつもあるとか、皆さん言っていますが、私たちは駅まで歩いていかなければなりません。大学は東京経済大学がありますが、スポーツ関連の施設にすぎません。駅もなければ、国道も走っていない。鉄道もなければ、踏切の事故もない。こういうまちでありますので、市民の悲願でありますモノレールの早期

延伸を一日も早く実現していかなければなりません。

今日午前中、東京都庁で10時から会議がありました。10時から開始ということですから、遅刻してはいけないということで、武蔵村山市を7時50分に出発しました。１時間40分から50分ほどあれば到着するだろうと思ったら、10時５分に到着し、会議に５分ほど遅刻してしまいました。何が言いたいかというと、国道も走ってない。国立インターから乗ったのですが、国立インターまで50分もかかりました。一日も早く立川辺りにインターができないかと思っています。立川から35分、40分ほどで国道のインター、首都高速道路のインター、中央高速道路のインターが近辺にできないかというお話が今日出てまいりました。それも、私たちは期待をしております。何しろ国道が通ることと、ＪＲがなくてもいいからモノレールが通ること、これが市民の悲願であります。

ところが、武蔵村山市民は、長く住み慣れて不便さが分かっておりますので、バスがあればいいや、自転車で通えるところならいいや、あればいいやという、期待を持っています。私が初めて市長に当選したときに、石原知事に挨拶に行きました。「武蔵村山市の藤野と申します。このたび初当選させていただきました。」「おっ、東村山の市長か」と言われました。志村けんにはかないませんでした。しかし、当時は、日産自動車村山工場がある武蔵村山市と言えたのですが、今はなくなってしまいましたので、大きなショッピングモールであるイオンモールがありますと言っています。しかし、本来であればイオンモールではなく、武蔵村山市の地場産や、武蔵村山市が元来伝承してきたものをＰＲしていかなければいけない。これが私の強い思いであります。

武蔵村山市におきましては、本日、ＰＲコーナーに展示させていただいている村山みかんですが、東京には、みかん狩りができるまちというのは、どこを探してもないと思います。樹齢60年というみかんもあって、大変形もよく甘くなりました。そして、そのみかんは無農薬であり、ワックスもかかっていないため、みかんの皮を干して、しばらく置くとカリカリになります。それを村山かてうどんの中に入れて食べると、大変おいしい村山かてうどんが食べられます。

武蔵村山市の悲願は、何といってもモノレール早期延伸の実現であるため、東京都や国の皆さんのお力を借りて実現しなければいけないと思っています。

ほんの１ページしか読めませんでしたが、ありがとうございました。

（ファシリテーター細野名誉教授）

ありがとうございました。

９市の市長さんたちにお話しいただきましたけども、やっぱり期待したとおり各市のそれぞれ行ってみたいまちというＰＲがとてもお上手でしたね。また、時間を守ってくださったことに対して深く感謝申し上げます。さあ、我がまちの魅力というのがこれで出たわけですけれども、それを９市、100万人都市にどういう形で繋げていくのかということ、連携して繋げていくにはどうしたらいいかということを第２ラウンドでお話しいただきたいと思います。

観光というキーワードがありました。人を惹きつけるにはどういうコンテンツが必要になるのか。地域産品、マルシェというのも、どこでやったらいいのか。それから、魅力を伝える情報発信はどうしたらいいのか。そのあたりのスケールメリットって本当に大

事ですね。皆様から非常に貴重な意見をいただきました。

さあ、第２ラウンドになる前に休憩がございます。フロアの皆さんに、これはぜひ質問したいということをお書きいただいて、それを私が見て、「これは採用するけどこれは採用しない」とか「これはコンバインして、あるいはジョイントしてやるよ」とか、そんな形で質問をぶつけたいと思います。

これから意見交換になるわけでございますけど、ひとまず司会にマイクをお戻しいたします。どうぞ。

（司会）

はい。ありがとうございます。今、細野先生からもご紹介ありましたけれども、これより休憩とさせていただきまして、再開は４時 35 分とさせていただきます。

この休憩時間の間に、皆様にはこちらの質問カードの記入と投函をお願いしたいと思います。皆様からのご意見をこの後の意見交換の中で取り上げたいと思っております。ただいまの各市長の発言やファシリテーターの細野様の基調講演について、ご質問のある方はこちらの質問カードに記入いただきまして、会場の外のカード記入コーナーに置いてある回収ボックスにご投函いただければと思います。記入コーナーに筆記用具も用意してあります。そして、回収ボックスへの投函は、休憩時間終了の５分前に締め切らせていただきます。時間の都合上、全ての質問にお答えすることはできませんが、ご了承ください。

また、各市のＰＲコーナーも会場を出たところにございますので、皆様、そちらもぜひごらんいただければと思います。

それでは休憩に入ります。再開は４時 35 分となります。

【休憩】

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。それでは、再開させていただきます。

第２ラウンドは、さっきの第１ラウンドでちょっと言い残したことを少しずつ補足していただこうかなと思いましたけれども、市長さんたちは、「今までとは同じことを話し

てもしようがねえな」と思っていらっしゃる。だったら第２ラウンドはフロアからいただいた質問を中心にぶっつけ本番でやりましょうと、こういうことになりました。

私自身も取捨選択しますけれども、お時間の関係で触れられないことがあるかもしれませんけども、これはご容赦いただきたい。

まず、総論ではなく各論からいきましょう。各論は、武蔵村山市長へ、「町田市はモノレールの延伸を図るため用地買収をしているけど、おたくは一体どうしたいんだ。どういう方法を考えているんだ」と、そのあたりの話をお願いしたいと思います。どうぞ。

（武蔵村山市長）

モノレールの延伸は、市民の悲願であります。武蔵村山市は、上北台から箱根ケ崎までの総延長が約 6.7 ㎞、現在の新青梅街道は幅が 18ｍとなっているため、両端を６ｍずつ用地買収して幅 30ｍの道路にし、そのセンターに緑地帯をつくって、そこにモノレールの橋脚をつくるという構想は既にできております。そして、中心駅となる武蔵村山市役所の南側には、区画整理事業として、新青梅街道の沿道として、区画整理事業の用地買収は 100％できております。そのまちづくりの区画整理事業もかなりの用地買収が進んでおりまして、明らかにそこが武蔵村山市の中心になっていくのだろうなということで、モノレールの延伸については、具体化されてきていると思います。ですから、市が用地買収するのではなく、東京都に用地買収をしていただいている事業ですので、町田市よりも大きく前進しています。町田市は東京都がいまだに用地買収をしてくれないので、町田市が、公社ではなく、自家買いをしているかもしれませんが、町田市は、区画整理段階より、東京都の都市計画決定されている地区を用地買収しているだけであって、そこにモノレールが来るとは限りません。なぜなら、モノレールの都市計画決定がされていないので、町田市は、何のために購入しているのか、モノレールの早期延伸のためには役に立たないのではないかと、町田市の市長がおりませんから言います。しかし、町田市の市長がいたら、先行していますねという話をします。

ですから、今のところは、町田市がそれを購入したのか、武蔵村山市が購入しないからといったことで問題にはならないと考えています。明らかに上北台と箱根ケ崎区間 6.7 ㎞が優先して、その後、町田市、八王子市方面に進んでいって、多摩をループできるようになっていくのだろうなと、そういう考えを持っております。

以上でございます。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございました。

では次にいきましょう。次の各論には、福生市長にお願いしたいですが、「横田基地の民間利用はどうなんでしょうか」、可能性としてはと、こういう話です。どうぞ。

（福生市長）

大変お答えしにくい質問だと思っていますけれども、私ども、やっぱり戦後というか、旧帝国陸軍、昭和15 年からずっと多摩飛行場から始まって、今の米軍横田飛行場という形で、米軍の管轄になってからもう75 年ぐらい一緒に、隣人として共存しているわけでございます。私も月に２、３回は必ず横田基地の中に入って司令官といろいろなお話をさせていただくわけでございますし、今後、将来にわたってどのようなものになっていくかということは、国防で国の専管事項でございますので、なかなか一自治体の長としてもお話はしにくいところがございます。

ただ、立川の清水市長なんかのお話を聞いていても、やっぱり返還されると、ちょっとうらやましいなというところがございます。これだけやっぱり土地が有効活用できて、そして、昭和記念公園とか、さまざまなもので市民が満喫できる場所ができるということは非常に私どもも期待しているところでございますが、やはり横田基地というのは、非常に今、グローバルホークを展開してきたり、もうこれグアムに帰りましたけれども、それから、オスプレイが配備されたりということで、どんどん重要拠点化しているのではないかなということを思っています。そういう部分でいうと、やっぱり騒音に対してのうるささや、それから、さまざまな部分で米軍とのトラブル、いろんな形でやっぱり難しいところがあるので、そういう部分は防衛省を通じてさまざまなお願いをしております。

で、よく司令官とお話するんですけど、国道 16 号線の立川方面というか、八王子方面から来た時に、右側の部分の横田基地、それから、青梅のほうに向かって左側の部分に西地区というのがございます。これは、集客施設があったり、あるいはボウリング場もあったり、保育園、幼稚園があったりして、基地に関する重要拠点でもないところがあるんで、ここだけはぜひ、私どもにも十分に使わせていただきたいということも申し上げています。

特に、昔、私どもが英語とか、音楽の勉強を聞いていた、ラジオなどで聞いていたあのＦＥＮみたいなものですね。Far East Network、今、ＡＦＮとなっているんですか。American Forces Network に変わっていますけども、そのスタジオがあるんで、そういうところもぜひ観光客とか、あるいは市民に開放していただいて、十分にこうやって友好も図っていただきたいということを申し入れていますので、さまざまな面でやっぱり横田基地との連携は密にしていかないとですけど、まあ、民間利用ができるかどうかは、ちょっと私の口からは申し上げにくいということでございます。

以上でございます。

（ファシリテーター細野名誉教授）

ありがとうございます。

では、各論の３番目にいきましょう。会場に弁護士さんがいらしてますね。裁判所の立

川支部を地方裁判所にしたいという話なんですけど、このあたり、いらっしゃいますか。はい、では１、２分でご発言をお願いします。

（参加者）

弁護士会多摩支部から参加させていただきました。

弁護士会多摩支部では、立川にあります東京地方裁判所、家庭裁判所立川支部を立川地方裁判所、立川家庭裁判所に昇格させようという運動をしております。多摩は、人口も420 万を超えて、裁判所の事件数も全国 10 番以内、家事事件は全国４位の大きな裁判所ですが、本庁でなくて、まだ支部という、ちょっと低い扱いです。そのため、行政事件とか、簡易裁判所の控訴事件というのができずに、霞が関のほうに行かなければいけません。また、支部では独自の予算権、人事権がないので、裁判員を増やしたくてもすぐに増やせない。そういった問題もあります。司法サービスの向上という観点から本庁化したいと思っています。

また、多摩地域全体の活性化という観点からも、この裁判所の本庁化は重要だと思っています。以前、裁判所の支部は八王子にありましたが、立川に移転した後、その周りは大分人通りが減ってしまいました。そういう意味では、裁判所の存在は人の流れや経済活動にも大きな影響を与えていると思います。立川の裁判所が本庁になることで、もっと大きな人の流れや経済的効果が生まれて、地域の活性化に資するものと思っております。

このような裁判所の本庁化について、行政の立場からも積極的に賛同いただいて、地域の活性化等につなげていきたいと思っていますので、ぜひご検討をよろしくお願いしたいと思います。今後とも、ぜひ、我々としても、各市長様にご報告したいと思いますので、その際はまたよろしくお願いします。

本日、どうもありがとうございました。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございました。

私の隣の立川市長が東京都市長会の会長でいらっしゃいますので、一言お願いします。

（立川市長）

東京地方裁判所の立川支部の存在というのは承知しておりますし、３、４年前から、そこに携わっている方々が支部でなく、裁判所に昇格をしたいというお話は風の便りに何回か聞いております。私は、立川市にとって大変大切な、大事なことだと。立川のまちが裁判所が存在することによって、全国に市としての存在を誇示できるのではないか。ぜひ、私としては応援をさせていただきたい。ただ、今までも風評、あるいは風の便りに聞いているだけでございますから、公の席でこの話を、この話題を取り上げたということはここが初めてでございます。私ただひとりの価値観で今、お話を申し上げました。市議会の皆さんともこのような話、テーマで話をしたことは一度もございませんので、そこだけはご承

知おきいただきたいと存じます。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございました。

各論は終わりました。これから総論のほうにまいりたいと思います。

広域連携サミットというのは今回で４回目でございます。どういう実を上げたらいいのか。早速この回からそのお話をしたいと思うんですね。「本気で広域連携を進めるならば、９市で組織を立ち上げるべきではないか」というふうなご意見がございます。あるいは「多摩地域で統一的なブランディングをしたらいいのではないか」こういうお話がございます。この総論に対して、９市の市長さんで「これについては俺が一言あるよ」というのがございましたら、ぜひ手を挙げて、はい、では、昭島市長、よろしくお願いします。

（昭島市長）

昨年に昭島市で企業サミットをさせていただきました。一部上場会社のトップの方と、企業との連携ということでお話しさせていただきました。そのとき、昭島市にある国際法務総合センターという、法務省の施設の中にある国連アジア極東犯罪防止研究所のバックアップをしている刑政財団の理事長が、今年亡くなられました堺屋太一先生でした。基調講演をいただいたときに、「あ、これだ」と大変共感させていただいたお話がありました。基調講演の内容をかいつまんでお話ししますと、江戸時代は天下泰平だった。明治に入って、富国強兵、やはり強い日本でないといけない。昭和になって戦後、高度経済成長、豊かな日本をつくっていかなくてはいけない。そろそろ新しい年号になるのだから、新しい時代になっていかなくてはいけない。それにはやはり楽しい日本でないといけない。住んで楽しい、働いて楽しい、そうした日本、楽しい日本をつくっていかなくてはいけない。明日の楽しい日本、楽しい昭島にしていかなくてはいけない。

そして、昭和記念公園は、昭和天皇の在位 50 年を記念してつくったところであります。この公園をどうやって生かしていくか。今後、2025 年には大阪の万博があります。かつて鈴木俊一さんが、大阪万博の事務局長をやられ、その後堺屋太一先生が事務局長をやられ、名古屋にパビリオンを持ってきて、そのパビリオンはすごいよかった。だから、2025 年に向けて、大阪で万博をやるときの、そのパビリオンを皆でこの地域の首長、そして、知事も挙げてパビリオンを一つ昭和記念公園に持ってきて、そこで活性化するというのもいい手じゃないかと。それで皆さんが協力し合い、目標として、昭和記念公園というこれだけのすばらしい公園があるところに、大阪万博でやったパビリオンを持ってきて活性化して、９市で寄り添いながら頑張っていくのも一つの手かなというふうに思いました。

（ファシリテーター細野名誉教授）

壮大なアイデアですね。

立川市長、どうぞ。

（立川市長）

実は、ＪＲ立川駅の南口にモノレールの立川南駅があります。現在、その近くに東京都との合築施設を建設しております。モノレールのデッキの高さと同じ階層のところに立川市の割当の 100 ㎡という床面積を持つ場所を確保しています。この場所につきましては、いろんなお話がありましたけれども、立川の魅力を多摩全域に、あるいは日本全域に広げていくために、情報発信基地をつくっていったらどうだということで、令和３年あるいは令和４年頃を目指しまして、今、計画をしているところでございます。その中では、立川１市だけではその情報量が少な過ぎるのではないか、もったないのではないかと。ですから、多摩全域の自治体の情報発信基地にこの場所を使っていただいたらどうかなという考えを持っております。機会を捉えて、実はそのお話をこの９市のメンバーの皆さん方にお話をさせていただきたいなと、考えてきたところでございます。ですから、もしよろしければ、そのお話を改めて、正式に話をさせていただくチャンスをいただければというふうに考えております。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい、ありがとうございます。何かそれで連携組織みたいなものを構築されるとか、あるいはブランディングで名前を９市全体で統一的なイメージが持てるような。そういう施設づくりというのがあっていいかもしれないですね。ありがとうございました。

ほかに、こんな話があります。「９市の連携が今後広がって、10 市、11 市となる可能性はありますか」こういうお話なんですけど、どなたかお答えになられますか。どうぞ。

（小平市長）

私は、この広域連携サミットは、何かすぐ成果物をつくるものではなくて、もう少し時間をかけて、まず、顔合わせ、腹合わせ、力合わせで、無理して何かをつくるというよりは、まず、お互いが信頼関係をつくるということ。もちろん首長だけじゃなくて、市の職員が信頼関係をつくっていくことで、何回かやっているうちに課題が整理できてくる。ですから、今の段階で新たに何か市を加えるということではなく、まず、この９つの市が課題を共有して前に進むということではないかと思います。

具体的に言うと、どこの地方も公共施設は、人口減少や、あるいは老朽化によって更新時期を迎えていると思います。どこの市もお話を伺っていると、将来は人口が 10%から 20%減るということになるわけです。そうすると、当然縮減をしたり、合築や複合化は避けて通れないわけです。小平市も文化施設がありますが、１市で持っていくということではなくて、もっと広域的にどこの市も同じようなものを持つのではなくて、例えば立川だったら、交通の結節点ですから、結節点にこういう施設というのはある。利便性が高いですから。ところが、逆に小平市の場合は、多摩北のほうでそれほどの利便性はない。でも、玉川上水があって、土の道があって４㎞、５㎞歩けるわけです。動物も結構います。こう

いう役割分担を、お互いの特徴をそれぞれが共有して、同じものを求めるのではなく、それぞれ持っている特徴をお互いに共有し合うということが大事で、私は、この９市がまず、時間をかけて仲良くなっていくことだというふうに思っています。

（ファシリテーター細野名誉教授）

ありがとうございました。そうですね、今、人口減少時代だし公共施設を全部フルセットで持つ時代はもう終わったのかもしれませんね。そうすると、どういう連携の仕方をするのか。それぞれの特徴、地理的な特徴もあるし、財政規模とかそういうのはありますから、そういうことで信頼関係をまず醸成するということですね。ありがとうございました。

それから、まちづくりには行政だけじゃなくて企業との連携、これは業務委託や指定管理の話じゃなくて、それぞれの組織体として、持てる能力をどういう形でコラボしていくかということも大事じゃないか。そのために９市はどういうビジョンを持ったらいいんだろうか。こういうお伺いがございました。どなたか。はい、どうぞ。

（国分寺市長）

国分寺市では、今、公民連携というのを盛んにやっています。16 の団体とやっていますけれども、やはり行政でやれる体力というんでしょうか、知恵というんでしょうか、そういうものはやはり限られている。そこで、財源的にも限られているということになると、やはり民間の方々の力を借りないと、自分の身の丈以上のことはなかなかできないわけであります。その点，民間企業さんというのは、やはり広域的にやっているんですね。例えば多摩信用金庫さん、９市に店舗ありますよね。そういうふうに市を超えた形での情報共有ができたり、例えば連携が一緒にとれて、９市で組んでこういうことをやるんだということであったり、組み合わせはいろいろできてくると思うんですね。だから、テーマによってそういうやり方ができるのではないでしょうか。

それから、あわせて、このテーマでもありますように、自治体間同士の連携ってすごく重要だなと思っています。市民の側に立って、どういうものを求めているのかを考えると、自然と出てくるような気がするんですね。たとえば，国立市さんとはたまたま高架下の利用で、お互いにそんなに大きな利用可能面積がなかったので、サービスコーナーを両方で一緒につくってしまったほうがトイレも一つでいいし、いろいろなことも考えると、駅も両方の市民が使っているので、これは市民が喜んでくれるんじゃないかなということから出てきたんですね。

あとは、連携としては、医療連携であったり、それから、先ほど小平市長さんから出ましたけど、公共施設の相互利用とか、こういうものはやはり市民がどういうふうにしてほしいかということを聞いていくと、これ、市境だけど、こっちに近いんだから、家に近いんだから、立川市さんのものを使わせてくださいよとか、そういう要望が出てくるんですね。だから、そういう要望をそれぞれ酌み取って組み合わせていくと、自然とこの連携が

広がっていくんじゃないか、そうすると、それぞれの単独市で考えることよりも、市民にとっていい連携ができていくんじゃないかというふうに思っています。

ですから、そういう意味でいいますと、ここは９市なんですけれど、先ほどちょっと出てきたように、10 市、11 市になっていくかもしれない。でも、それが市民にとってよければ、それでいいのではないか。もう一つは、活性化、市の活性化のためにどうしていったらいいかという点では、観光等の面での連携があるんじゃないかなというふうに思っています。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございました。

フロアから、「議論の中に、日本は災害大国なのに防災の話が出なかった」という質問が来ています。人口密度も 23 区から比べると低いですし、ひょっとすると直下型地震となったとき、23 区からこちらのほうに流れてくる人たち、たくさんいるような気もするんですね。そのあたり、９市で防災対策をどのような形でコラボできるか、そのあたりのお話を少しお願いしたいんですけども、どなたか、はい、どうぞ。

（国立市長）

実は、京浜河川事務所長さんがお見えになられていたと思うんですけれども、多摩川を抱えているところですね、小平さんはお見えになってないかもしれませんけど。その中で、今回の出水、台風で河川のどこから流れたかっていう地図をね、お持ちいただいたら、非常におもしろいことに、府中さんから下流部はほとんどやられているんですね。それから、国立から昭島さん、福生さんぐらいまでは大丈夫。その上はまたやられているということで、それに伴って避難される方の人数とか、相当各市とも収容する場所がないぐらい、あるいはどうやってそのことを周知するのかというような。

この圏域にすごくこの前の台風でおもしろいことを感じましたのは、国立で災害対策本部をやっていると、国分寺さんの情報がどんどん入ってくる、立川さんの情報がどんどん入ってくる、府中さんの情報が入ってくる。国立市民から、国立は何やっているんだ。要するに、情報はほとんどもう、市民のレベルでは共有化されているんだけれども、その判断の一つ一つが市の置かれている環境によって違うということで、ところが、市民の方はそれはなかなかわからない。そうすると、その情報の共有をどうしていくかということも一つは課題かなと思います。

それから、直接的には、じゃあ、被災したときにその市民の方をどうお互いに支援するかっていうのは、もう既に各市はそれぞれ友好都市であるとか、関係する都市とは、地方都市ではやっていますけども、おそらく小平さんあたりでは川がない。小平さんと国立はぜひ連携して、この９市の中でお互いが持てるところを持ち合っていくことは、非常に、今日ご質問あったように、重要な事項じゃないかな。そんなことで、やはり実務的なレベルで話し合ってみる必要があるのかな、こんなふうに考えます。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございました。この件、すごく大事だと思うんですけど、ほかにいかがですか。はい、どうぞ。

（福生市長）

今、永見市長がおっしゃいましたけども、確かに今回の台風 19 号を中心に、非常にやっぱり多摩川沿い、あるいは多摩川支流も含めて大変な状況でありまして、で、私どもも、市内の中に多摩川沿いに３つの公園がありまして、それがほぼ調整池というんでしょうか、遊水池、水を引き入れる場所になっているんですけれども、それを早目にやっぱり下流のほうにも話をしていかなきゃいけないなということも、今回教訓として覚えさせていただきました。

それともう一つ、先般、私ども、外国人の比率が多いところでございますので、こういう非常事態のときにどういうふうに防災無線を使って、非常時にどういう形で誘導していくかという部分も課題として残っています。23 区から引っ越してこられた方というのは、一番問題視されるのは防災行政無線で、もううるさいというか、こんなのは私どものところのそばには付けないでくれというふうな話が結構あるんですけれども、いかに今回の災害に重要な視点を占めているかということがつくづくありますので、外国人に対しても、公共サインを含めてどういう形でこれから、この国はやっぱり人口減少ですから、外国人を今、引き入れようとしていますので、そういう部分も含めて、国と、あるいは東京都、またこの９市とも連携してやっていきたいなと思っています。

以上です。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございました。防災対策についてのお話でございました。はい、どうぞ。

（日野市長）

今回日野市は、直接河川の氾濫等はありませんでしたが、避難所に約8,600人が来られました。25 校ある学校のうち、洪水ハザードマップ浸水地域の８校を除く 17 校に避難したということであります。もちろん職員は配置しました。今、いろんなその総括してということでありますけれども、やっぱり避難所、学校によっては 1,000 人を超える避難者がいて、もうどうにもならないということがいくつかありました。浸水地域の避難所は開設できない。どうしたらいいか。やっぱりそうした場合に日野市内だけで避難所、避難をさせるという自己完結はできないので、どうしても近隣の中でということを考えざるを得ない。かといって 23 区ではできませんし、やはりこういう９市、隣り合った９市の中でということもこれからは考えていかないと、ということがあります。

おそらく今年のようなことがまた来年以降も、もっと大きい台風がくるかもしれないです。そして、地震も起きるかもしれません。意外に各自治体同士情報が入る、さっき永

見市長からもありましたように、それぞれ、いざという場合、どうするかという話が、地方の都市とは防災協定を結んでいます。しかし、この三多摩の地域では意外とない。そこをどうしていくかということは、これから考える必要があるかなと痛切に今回感じたところであります。

以上です。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございました。

もう一つあります。何かというと、23 区から見て比較的土地は多い。それから、ツーリズムというお話がありますけども、どうも多摩は 23 区から近いですね。一泊旅行なんていうのはできない。そうすると、ツーリズムでどういうことが考えられるかというと、１つは、スポーツツーリズムみたいなことが考えられるんですね。日帰りのお客さんでも 23 区からたくさん来てもらう、あるいは首都圏からたくさん来てもらうということも大事かもしれません。4,000 万人ぐらいいますから。そのために、じゃあ、９市ではどういうスポーツに対する対策を考えるか、このあたりで、若干出てきましたけれども、どなたかお話しいただきたいと思いますけれども、いかがでしょう。はい、どうぞ。

（武蔵村山市長）

避難所のお話でしたが、ツーリズムの話以外で事前にお話をさせていただきたいと思います。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。どうぞ。

（武蔵村山市長）

この台風 15 号と 19 号は、武蔵村山市も始まって以来の 600 人を超える方が避難してきました。ただ、幸いにも夜 11 時半頃には雨も風も止んで、泊まらないで帰った方が大半でしたが、そのときに千葉県の方がわざわざ来て、「千葉県なんですけども、武蔵村山市の避難所に避難させていただいていいですか」ということを言われました。今度は、武蔵村山市民が瑞穂町に避難をするときに、「瑞穂町に避難をさせていただいていいですか」と言ったそうです。すると、瑞穂町が快く受けてくれたそうです。東大和市でも、行政境のため、いろいろな自治体の方が避難してきたそうです。そこで、これを市民に明確化する形で、例えば９市で連携をして、相互協定を結び、図書館の相互利用ではありませんが、この地域は武蔵村山市民でなくても、避難所として利用できますと周知しておけば、市民としては、問い合わせをしなくても避難していいのだなという気持ちにもなっていくのではないかと思います。９市が一つになって、市民を守っていく形ができているということを皆さんが思っていただけるのかと思い、今日、これを提案しようかと思っていました。他のお話になってしまいましたが、そのことも少しつけ加えさせていただきました。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございます。

じゃあ、また、スポーツについてどうでしょうか。昭島市長。

（昭島市長）

スポーツは大事な分野でありますが、やはり場所があるかないかということもありま

す。この前の台風で多摩川のグラウンドが壊滅状態となりました。多摩川を上がったところには、陸上競技場とか、野球場とかあります。また、民間のテニスコート、ゴルフ場もありますし、昭島市の場合は、オリンピックの競技であります、スポーツクライミングのリードとボルダリング、スピードの施設もあります。そういった施設を生かしながら、この周辺の皆さんに来ていただいたり、23 区の皆さんが来ていただいたりということは大事かなというところだと思います。

場所をいかに確保していくか。災害を受けたところを克服して頑張っていきたい。また、９市の皆さんが集まって災害復興にはしっかりとした手立てをしながらやっていこうということは肝心だと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございます。

（参加者）

はい。先ほど細野さんがぶっつけ本番でいくというので、立川市長に一つ質問します。

多摩信用金庫の本店が今、新しいところにやってきます。その周辺にいっぱい建物が建っています。ということは、固定資産税が立川市相当入ってくるはず。その固定資産税はいかに使いますか、収入を。

（ファシリテーター細野名誉教授）

いや、それはね、どうですか。市長さん。

（立川市長）

お金に色はついてないので、なかなか決めづらいですけれど、ただ、高齢化社会はどんどん進んでいきます。大変お金がかかる施策をしていかなければなりません。これから増えていく税収は、おそらく子育て施策と、そして、高齢者施策にほとんど費やしていかなければ行政を運営していけなくなるんじゃないかなというふうに考えておりますので、子育てか高齢社会対応のほうへ、税収の増えた分はいくのではないかなというふうに思います。

（参加者）

ありがとうございます。私は 82 歳です。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい、お元気ですね。ありがとうございました。

どうぞ。

（国立市長）

先ほどスポーツツーリズムということで、うちは、スポーツ施設がないし、今回の台風で壊滅的な被害を受けていますので、なかなかそのことには答えにくいですけれども、一つ事例をちょっと申し上げますと、国立市内に一橋大学の学生がアパートを借り上げまして、それを宿泊施設にして。それは何でしているかというと、インター周辺の農地をもって農業をやっている、これも法人なんですけども、そこと連携をして、体験型で外国人の方が来て泊まって体験をしてという。農業の体験をして、また戻られている。それ、なかなか好評のようなんですよ。しかも、学生がその資格を取ってやっているというようなことで、多摩地域で実際に海外から来ていただいて、何が提供できるかという、その体験

をできる、あるいは受皿としてこういうことができますよって、なかなかこれっていうのはないんですけれども、共通項として見れば、意外と農業とその民泊、こういうものを組み合わせると新しい形のものができるのかなというようなことを考えます。ですから、スポーツだけではなくて、そういうような横の連携の中で共同項をつくってやっていくというのも一つおもしろいインバウンド対策になるのかなって考えています。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございます。

隣の加藤市長さん、お願いします。

（福生市長）

はい。スポーツに対しての連携ということでございますけども、先ほどから申し上げましたとおり、私ども、本当に面積の小さいまちでございますので、さまざまな部分で横田基地の中、あの中というのは、全部ジムから、陸上競技場から、オリンピック規格のものが全部思いやり予算ででき上がっています。ですから、今回の東京オリンピック・パラリンピックに関しても、キャンプ誘致であの中、使わせてくれって言ったことがあるんですけれども、アメリカチームでさえもああいうところは使わせないと。やっぱり軍事基地なんで、そういうことができないということをおっしゃっています。

それと、多分この今回の９市のサミットの中でも一番のキーワードだと思うんですけれども、皆さん方、これから何年後には人口減少に転じるということですけれども、私ども、この中で唯一の西多摩地域でございまして、福生市を玄関口にして、４市３町１村あるんですけども、10 年ぐらい前から人口減少がどこも始まっています。ですから、スポーツ施設等、本当にこの９市の連携がもしなし得れば、野球場だろうが、陸上競技場だろうが、やっぱり大きく連携をして、一つのすばらしい競技場ができて、そこを使うことができるような形にいずれなっていかないと、やはり私ども、その地域の行政としての運営ができていかないんではないかなという危機感を持っていますので、そういう動きも期待しているところです。

以上です。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい、どうぞ。

（昭島市長）

加藤市長がいいことをおっしゃっていただきました。昭島の東中神というところに総合スポーツセンターがあります。これは、もともと東京都所管の多摩スポーツセンターでありまして、現在は当市に移管されています。昭島を中心とする近隣市の皆さん方のスポーツ施設として、野球場、陸上競技場をはじめ、弓道場、剣道場、体育館施設、温水プールまであります。今、東京都に話をしているんですが、屋外プールをつくっても、夏、暑過ぎるとプールに入れない、屋内のプールしか使えなくなっている。だから、そういう面も考えると、加藤市長さんおっしゃったように、拠点となるような施設、東京都の中心にあって拠点となるところを、この９市がバッグアップしながら、ここはいいのではないかと決めて、大いにそのスポーツや身体を鍛えていくことも含めて、また、レクリエーションをやってもいいのではないか、こういう時代になってきたのではないかというふうに

感じています。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございました。

もう時間が迫っているんですけど、インバウンドの話がちょっと出ておりましてね。これから外国人が来る、人口減ですけれども、交流人口は増えるかもしれない。そのときに言語対応どうするかということ、これは９市で共通のデザインかなんかにして、言語対応するということも考えられるかなと思うんですけれども、そんなことも含めまして、ご当地で開催したわけですけども、最後、まとめて、立川市長さんに少しお話しいただきたいと思いますけれども、よろしくお願いします。

（立川市長）

インバウンド対策といたしましてということなんですが、立川市で今、全人口の約 18 万 5,000 人のうちの四千数百人ぐらいが外国人ということになっております。基本的には、地域の方々、ボランティアの方々が自主的に手を挙げていただいて、そして、その方々に母国語でお話をして、いろんなお世話をしているというふうな状況になっております。それほど爆発的に外国人人口が増えてくるということでありませんので、今のところはボランティアの皆さんの対応で何とか間に合っているというふうな状況でございます。

（ファシリテーター細野名誉教授）

はい。ありがとうございました。

６　総括（中央大学名誉教授　細野助博）

（ファシリテーター細野名誉教授）

少しここからまとめに入りたいと思うんですけれども、このサミットも４回目を迎えました。９市の市長さんたちがお集まりになって、要するに、９市がどう魅力的なまちづくりを進めてゆくか。それには適切なリーダーシップと市民とのコラボレーションが必要になります。それを円滑に進めることをローカル・ガバナンスっていいます。地域的な課題を住民も巻き込んで、地域固有の課題をどう解決していくかというローカル・ガバナンスがとても重要な時代が来たと思います。１つは、人口減少、だから財政的にもそう余裕がある時代ではない。それから、高齢化によって福祉の問題が非常に大きくなる。だから課題が山積み、待ったなしになる。それから、災害大国ですから、防災も考えなきゃいけない。本当に問題あるいは課題は山積しているわけでございますけれども、だからこそ市長さんのリーダーシップというのはとても重要だと思いますし、市長さんたちが個々に持っているビジョンがとても大事なんですね。

そのビジョン、そして行政手腕というものを持ち寄って、９市による連携の実を挙げる

ことが多摩地域の活性化には重要なポイントになります。先ほど私は 100 万都市のパワーがあるという話をしましたけれども、それが十分に発揮される前提条件に、小平市長さんから出ましたけれども、まず、信頼の醸成が必要だと。性急にしても実のある結果が出てこない。まさしくそうでありまして、どういう形で信頼を醸成していくか。それは、一つはこの９市サミットを毎年毎年開催することによって、それぞれ相互の信頼をつくっていく。あるいは皆さん、各市の事情をそれぞれ共感・共有するということが一番大事だということですね。

２つ目、内と外に対する情報発信をどうするかということはとても大事なんです。そうすると、我が市はというよりも、今、９市はこのように考えている、多摩の地域は 23 区に対してこういうハンディがあるけれども、これを打開するにはどうするか、あるいはどういう魅力を 23 区に対して持っているんだろうか、あるいはどういう補完が 23 区に対してできるんだろうかということもやっぱり考えてみる必要があります。おそらく多摩地域の魅力づくりは、東京全体の魅力づくりになりますし、グローバル化競争の中で日本全体の魅力づくりになる。それぐらいの思いを持っていこうということをここで皆さんと確認したいと思うんですね。

そのときに各市が持っている魅力ある資源あるいは人材をどういう形で融通し、そして、コラボの実を上げていくのかということはとても重要になってくるということを、今日のお話をお聞きして私なりに感じたところでございます。

また、フロアの方からたくさんの質問をいただきました。個々にいただいたものに直接は触れてない場合もありますけれども、それは私自身が統合しまして、質問という形で変えさせていただいたということでございます。

ちょうどお時間でございます。ここで意見交換を終わらせていただきたいと思います。

それでは、進行を司会の方にお渡ししたいと思います。

（司会）

ありがとうございました。

７　閉会挨拶（立川市長　清水庄平）

（司会）

９市で協力できるのではないか、あれもできるんじゃないか、これもできるんじゃないかというアイデアを非常に興味深く拝聴させていただきました。

それでは、ここで、閉会挨拶に移らせていただきたいと思います。

立川市の清水市長、よろしくお願いいたします。

（立川市長）

まずもって、８市の市長の皆さん、大変ご協力ありがとうございました。そして、また、大変すばらしいリーダーシップを発揮していただいた細野先生に心からのお礼を申し上げる次第でございます。どうもありがとうございました。

９市の市長が揃ってそれぞれのまちの今のあり方、あるいは将来のあり方について情報発信しながら、外に向けてＰＲするということはなかなかないチャンスでございまし

たけれども、かなり活発なご意見をいただく中では、聴衆の皆さんもかなり勉強に、あるいは行政の内容を知るよい機会になったのではないかなというふうに思っているところでございます。

いろんなご意見が出ました。先ほど小平市長からもありましたが、出てきた意見の中でいきなり９市全部が協力する、あるいは連携するというのはなかなか難しいことではあろうかとも思いますが、連携可能なところから少しずつ進んでいくというのが、やはりそれぞれ市民の中から選ばれた首長の責任ではなかろうかなというふうに思っているところでございます。このような機会の中でさまざまな意見が取り上げられ、そして、さまざまな角度からご意見を頂戴する。私自身も大変大きな力、勉強になったと思っております。

各市の市民の皆さんはもちろん、他の地域から来られた方々にも、それぞれ身近な魅力を発見をしていただき、また、私どもへの示唆でもいただければ、本当にこれ以上の実りはないなというふうに思っているところでございます。

我々市長９名が多摩地域のさらなる向上、地方自治の向上のために連携をして力を合わせて前に進んでまいりたいという決意を固める、大変すばらしい引き金を引いていただいたと感じているところでございます。

最後になります。いま一度細野先生をはじめ、関係の職員の皆さん、あるいは市民の皆さんに心からのお礼を申し上げまして、本会を閉じさせていただきます。どうもご協力ありがとうございました。

（司会）

ありがとうございました。

以上をもちまして、令和元年度広域連携サミットを終了いたします。

皆様のお手元に配布しておりますアンケート用紙につきましては、会場外の入り口付近にアンケートの記載台を設けておりますので、そちらをご利用ください。

皆様、本日はご来場いただき、まことにありがとうございました。

令和元年度広域連携サミット報告書

編　集　広域連携推進協議会（事務局：立川市）
東京都立川市泉町１１５６－９
電話番号　０４２－５２３－２１１１（代表）